皆様、おはようございます。
主の復活をご一緒に喜び、イースターの礼拝をおささげしてから早３週間が経ちました。
あの日の朝、弟子たちは混乱の中にありました。いえ、その日の朝というよりも、木曜日の夜、最後の晩餐の後の出来事が混乱に満ちていました。
弟子たちはイエス様を見捨てて散り散りに逃げて行きました。

ルカ 22:31 シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。
22:32 しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。
22:33 シモンが言った、「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」。
22:34 するとイエスが言われた、「ペテロよ、あなたに言っておく。きょう、鶏が泣くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」。

マタイ 26:31 そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずくであろう。『わたしは羊飼を打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである。
26:32 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」。

ルカ 22:44 イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。
22:45 祈を終えて立ちあがり、弟子たちのところへ行かれると、彼らが悲しみのはて寝入っているのをごらんになって
22:46 言われた、「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らないように、起きて祈っていなさい」。
マタイ 26:38 そのとき、彼らに言われた、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、わたしと一緒に目をさましていなさい」。
26:39 そして少し進んで行き、うつぶしになり、祈って言われた、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」。
26:40 それから、弟子たちの所にきてごらんになると、彼らが眠っていたので、ペテロに言われた、「あなたがたはそんなに、ひと時もわたしと一緒に目をさましていることが、できなかったのか。
26:41 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。

26:42 また二度目に行って、祈って言われた、「わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」。
26:43 またきてごらんになると、彼らはまた眠っていた。その目が重くなっていたのである。
26:44 それで彼らをそのままにして、また行って、三度目に同じ言葉で祈られた。
26:45 それから弟子たちの所に帰ってきて、言われた、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。見よ、時が迫った。人の子は罪人らの手に渡されるのだ。

人の燃えたぎる決意はむなしく、主を否み、逃げ出してしまいました。イエス様が血の滴りのようにボタボタと汗を流して祈る時も、そこは石を投げれば届くほどの距離でしたのに、苦しみ祈る主を目の前にして、彼らは疲れのあまりに眠ってしまいました。心は燃えていても、肉体は弱い。
ふるいにかけられれば、失格者との烙印を押されてしまいそうな哀れな弟子たちですが、そんな弟子たちに対して、イエス様はこのように言って下さいました。

ルカ 22:28 あなたがたは、わたしの試錬のあいだ、わたしと一緒に最後まで忍んでくれた人たちである。
22:29 それで、わたしの父が国の支配をわたしにゆだねてくださったように、わたしもそれをあなたがたにゆだね、
22:30 わたしの国で食卓について飲み食いをさせ、また位に座してイスラエルの十二の部族をさばかせるであろう。
22:31 シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。
22:32 しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。

そのような混乱の後。復活の朝早く。御使いは女性たちに現れ、こう語りました。
24:5 女たちは驚き恐れて、顔を地に伏せていると、このふたりの者が言った、「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。
24:6 そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい。

24:10 この女たちというのは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ、およびヤコブの母マリヤであった。彼女たちと一緒にいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。
24:11 ところが、使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。

復活の日の夕方、主は朝に女性たちに出会われて後、夕方に疑い惑う弟子たちに現れて下さいました。
ヨハネ 20:19 その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。
20:20 そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。

女性たちの語る喜びの復活は信じられない。そして主の輝かしい信じられないから内に鍵をかけて恐れている。このようなにっちもさっちもいかない弟子たちに、主は幾度も現れて下さいました。
エマオの途上で、ペテロに、そして弟子たちに。魚を食べて見せても下さいました。

ヨハネ 21:1 そののち、イエスはテベリヤの海べで、ご自身をまた弟子たちにあらわされた。そのあらわされた次第は、こうである。

またも主は弟子たちにガリラヤ湖でお会いになって下さいました。

21:2 シモン・ペテロが、デドモと呼ばれているトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子らや、ほかのふたりの弟子たちと一緒にいた時のことである。
21:3 シモン・ペテロは彼らに「わたしは漁に行くのだ」と言うと、彼らは「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って舟に乗った。しかし、その夜はなんの獲物もなかった。

ペテロはトマスと共にいました。トマスはヨハネ 20:25 でこういった人です。
ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。

「疑い深いトマス」とよく言われますが、彼は熱心極まりない主の弟子でした。
ヨハネ 11:16 するとデドモと呼ばれているトマスが、仲間の弟子たちに言った、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」。
また、弟子の誰もが主の言葉をどう理解したらよいか分からずに沈黙していた時、彼が口火を切って主に尋ね、杉らしい主のお言葉を引き出したのです。
ヨハネ 14:5 トマスはイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」。
14:6 イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわた

しによらないでは、父のみもとに行くことはできない。
14:7 もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである」。

ナタナエルはイエス様からこう言われた人。
1:47 イエスはナタナエルが自分の方に来るのを見て、彼について言われた、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りがない」。
1:48 ナタナエルは言った、「どうしてわたしをご存じなのですか」。イエスは答えて言われた、「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」。
1:49 ナタナエルは答えた、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。
1:50 イエスは答えて言われた、「あなたが、いちじくの木の下にいるのを見たと、わたしが言ったので信じるのか。これよりも、もっと大きなことを、あなたは見るであろう」。
1:51 また言われた、「よくよくあなたがたに言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」。

いちじくはよくパレスチナに生えている樹木であり、いちじくの木の下で律法の教師はよく弟子たちを教えていました。その木の下にいるとは、熱心の神様の掟を学んでいたということです。

ゼベダイの子たちとはヤコブとヨハネ。彼らはイエス様からボアネルゲ、雷の子と呼ばれていました。気性が荒かったのでしょう。
ルカ 9:54 弟子のヤコブとヨハネとはそれを見て言った、「主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまうように、天から火をよび求めましょうか」。
9:55 イエスは振りかえって、彼らをおしかりになった。

マルコ 3:17 またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。

また、マタイ２０章では、彼らの母がイエス様に取り入ったことで、他の弟子たちが憤慨したという出来事もあります。
20:20 そのとき、ゼベダイの子らの母が、その子らと一緒にイエスのもとにきてひざまずき、何事かをお願いした。
20:21 そこでイエスは彼女に言われた、「何をしてほしいのか」。彼女は言った、「わたしのこのふたりのむすこが、あなたの御国で、ひとりはあなたの右に、ひとりは左にすわれるように、お言葉をください」

そしてほかの二人の弟子たち。この７人での漁が始まりました。

主の弟子たちと言えども完璧な人たちではありませんでした。彼らは一人一人主に見いだされ、弱さの中訓練を受け、育てていただいたのです。
彼らの貴重なお師匠様がイエス様でした。散り散りに逃げ去ってしまいましたが、彼らの大切なお師匠様は、今もイエス様でした。

ルカ 24:49 見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」。
乞うイエス様がおっしゃったこととどう整合性を得るのかは少し考えさせられるところですが、彼らはガリラヤ湖にいました。しかしこのことは彼らが弟子をやめて漁師に戻ろうとしていたとか、主のお約束を反故にして迫害を恐れて都から去っていたということにはならないでしょう。
ルカ 24:52 彼らは〔イエスを拝し、〕非常な喜びをもってエルサレムに帰り、
 24:53 絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。
このようにありますから、この日はたまたまガリラヤにいたのだと思います。主イエス様と共に進んだあの日の出来事を思い起こしながら、時にガリラヤに少しの間だけ過ごしつつ、ペンテコステ迄の５０日間を歩んでいたのかもしれません。

漁をして食べ物を得なければ飢え死にしてしまう、そういう窮乏であったとも考えにくく、彼らはイエス様を思い出しながらまたガリラヤ湖に漕ぎ出し、昔取った杵柄の漁へと赴こうとしていました。しかしその夜は何の獲物もありませんでした。物寂しいと言えば物寂しいこの夜の出来事です。

21:4 夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。しかし弟子たちはそれがイエスだとは知らなかった。
エマオの途上の出来事がまた起こっているような感覚です。
網を下ろして、引き上げて、ああと、深いため息をついてまた網を投げ入れる。このようなことを幾度も幾度も続けるこの夜の漁の様子を、ひとり岸で見つめている一人の人がいて、それがイエス様でしたが、弟子たちはそうとは気付きませんでした。そうとは気付かなくても、イエス様は私たちの側にいて、私たちの人生の様々のこと、喜怒哀楽をじっと見つめておられる。私たちがそうとは自覚しなくて、自分だけが孤軍奮闘していると思っている時にも、主は私たちと共におられます。

21:5 イエスは彼らに言われた、「子たちよ、何か食べるものがあるか」。彼らは「ありませ

ん」と答えた。

「子たちよ。」この「子」という言葉は、幼児をも意味する言葉で、「小さな子供たちよ」、「幼子らよ」という呼びかけであったようにも理解できるかもしれません。
本当に主の前に弟子たちは、私たち人間は、「おさなご」に過ぎないのだなあと思います。そしてイエス様は、慈愛深いお父さんのように、神様は私たちの親権者のように、いつも中止を払って片時も目を離さずに心配して、注意して見守っていて下さるのだなあと思います。子供がそんなお父さんの様子には気付かなくても、いつも気にしてみているのが親というもの。イエス様も、弟子たちの様子をじっとご覧になっておられました。
「子たちよ、何か食べる物があるか」これは、「わが子たちよ、苦労して夜通しやっているが、何にも取れていないみたいだね？」という、主のお気遣いにあふれたねぎらいの言葉のように感じられます。

彼らは「ありません」と答えた。
21:6 すると、イエスは彼らに言われた、「舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば、何かとれるだろう」。彼らは網をおろすと、魚が多くとれたので、それを引き上げることができなかった。

私は釣りや漁の事はよくわかりませんが、釣りにはポイントというものがあるのでしょう。適切な場所で、適切な深さで、適切なタイミングで釣り糸や網を投げ入れるのでなければ成功しないであろうことは想像できます。しかし彼らは元漁師のプロです。そしてポイントと言っても、小さな小舟の右に投げるも左に網を投げるも、大きな湖の中ではほとんど同じ場所に投げ入れているのと同じことだと思うのです。しかし主の御言葉に従うということは、そういう人間の経験や計算、常識をはるかに上回るものなのです。腕がクタクタだ、もう今日は絶対取れない。船の右の方に網を投げるなんて、さっきから何十回もしている。どこの誰だか知らないが、物好きな人だ。我々が何も取れないのを知って、からかいに来たのか。こんなことを考えていては、神様のご栄光を見ることは出来ないのです。

ヨハネ 11:35 イエスは涙を流された。
11:36 するとユダヤ人たちは言った、「ああ、なんと彼を愛しておられたことか」。
11:37 しかし、彼らのある人たちは言った、「あの盲人の目をあけたこの人でも、ラザロを死なせないようには、できなかったのか」。
11:38 イエスはまた激しく感動して、墓にはいられた。それは洞穴であって、そこに石がはめてあった。
11:39 イエスは言われた、「石を取りのけなさい」。死んだラザロの姉妹マルタが言った、「主よ、もう臭くなっております。四日もたっていますから」。

11:40 イエスは彼女に言われた、「もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」。
11:41 人々は石を取りのけた。すると、イエスは目を天にむけて言われた、「父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します。
11:42 あなたがいつでもわたしの願いを聞きいれて下さることを、よく知っています。しかし、こう申しますのは、そばに立っている人々に、あなたがわたしをつかわされたことを、信じさせるためであります」。
11:43 こう言いながら、大声で「ラザロよ、出てきなさい」と呼ばわれた。
11:44 すると、死人は手足を布でまかれ、顔も顔おおいで包まれたまま、出てきた。イエスは人々に言われた、「彼をほどいてやって、帰らせなさい」。
11:45 マリヤのところにきて、イエスのなさったことを見た多くのユダヤ人たちは、イエスを信じた。

ヨハネ彼らは網をおろすと、魚が多くとれたので、それを引き上げることができなかった。
21:7 イエスの愛しておられた弟子が、ペテロに「あれは主だ」と言った。シモン・ペテロは主であると聞いて、裸になっていたため、上着をまとって海にとびこんだ。

エマオの途上では、パンを割いて頂き、食卓の感謝と祝福の祈りの中、主だと気づきました。そしてここでも大漁の奇跡のその所で、彼らは主と気付きました。
私たちもそうではないでしょうか。悩みの中悶々として祈り続けるときには主が身近に感じられず、祈りなど本当に解決のためになるのだろうかと不安な気持ちでいるのですが、事が良いように運んだ時に、咄嗟に主が働いてくださったのだと気づくということは私たちにもあるのではないでしょうか。

彼らにとって、ルカ5章のあの大漁の奇跡をまざまざと思い出した時だったのではないでしょうか。

ルカ 5:1 さて、群衆が神の言を聞こうとして押し寄せてきたとき、イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、
5:2 そこに二そうの小舟が寄せてあるのをごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。
5:3 その一そうはシモンの舟であったが、イエスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の中から群衆にお教えになった。
5:4 話がすむと、シモンに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。

5:5 シモンは答えて言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましょう」。
5:6 そしてそのとおりにしたところ、おびただしい魚の群れがはいって、網が破れそうになった。
5:7 そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢に来るよう合図をしたので、彼らがきて魚を両方の舟いっぱいに入れた。そのために、舟が沈みそうになった。
5:8 これを見てシモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」。
5:9 彼も一緒にいた者たちもみな、取れた魚がおびただしいのに驚いたからである。
5:10 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネも、同様であった。すると、イエスがシモンに言われた、「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」。
5:11 そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。

主がそこにおられる。ほんの９０メートルの所におられた。私たちと共にいて、この寂しさも、心の隙間風も、悲しみも、苦労も、見て分かっていて下さった。その感動の中、ペテロは上着をまとって湖に飛び込み、イエス様に会いたいと全速力で泳ぎます。

21:8 しかし、ほかの弟子たちは舟に乗ったまま、魚のはいっている網を引きながら帰って行った。陸からはあまり遠くない五十間ほどの所にいたからである。
21:9 彼らが陸に上って見ると、炭火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあった。
21:10 イエスは彼らに言われた、「今とった魚を少し持ってきなさい」。
21:11 シモン・ペテロが行って、網を陸へ引き上げると、百五十三びきの大きな魚でいっぱいになっていた。そんなに多かったが、網はさけないでいた。

そこにはイエス様が朝食を用意していて下さいました。あたたかい炭火にあたりながら、美味しい焼き魚の匂いとパンの匂い。そしてそこにあのあたたかい、慈しみ深い主イエス様のお顔が。
ああ人にはやっぱりこのような温かい家庭が必要なのです。受け入れ、励まし、力づけ、赦し、食べて力をつけ、笑い合い、ほっとしてまた出かけていく我が家が必要なのです。
この世界の中には色々な家庭があり、断絶された家庭もあり、壊れてしまった家庭があり、害を与える、癒しを与えない家庭があります。戦いや悲惨があります。あたたかい、受け入れられる家庭があれば、そこを逃げ場にして、人はまた困難に立ち向かえますが、その心の基地がなければ、人はどうやって踏ん張ることが出来るのでしょうか。

イエス様が私たちの我が家です。イエス様が私たちのよりどころであり、赦し主であり、癒し主です。

１５３匹も取ったよ、お父さん。良くやったね、子供たち。さあ君たちが獲った魚もここにくべて、一緒に感謝して食事をしよう。褒めて、育てて、認めて、頼りにされて、子供たちは成長していきます。

21:12 イエスは彼らに言われた、「さあ、朝の食事をしなさい」。弟子たちは、主であることがわかっていたので、だれも「あなたはどなたですか」と進んで尋ねる者がなかった。
21:13 イエスはそこにきて、パンをとり彼らに与え、また魚も同じようにされた。
21:14 イエスが死人の中からよみがえったのち、弟子たちにあらわれたのは、これで既に三度目である。

ヨハネ 14:11 わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。もしそれが信じられないならば、わざそのものによって信じなさい。
14:12 よくよくあなたがたに言っておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである。
14:13 わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。
14:14 何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。
14:15 もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。
14:16 わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。

イエス様はわずか９０メートルの距離におられ、私たちの一挙手一投足を手助けされるわけではないのですが、私たちの、決して遠からない近くの所におられ、私たちの一挙手一投足を見ておられ、祈っておられ、分かっていて、労い、助け、励まし、用いて褒めて下さいます。主のお働きと私たちの働きを合わせて、苦しめる困難の地において、人を助けて導く漁師として下さいます。主の変わらないお導きとお交わりに感謝し、共におられる方の内に心癒され、いよいよ主の御力によって御言葉のうちに、御業に用いられたいと願うのです。

「一度死にし我をも」　聖歌 609

一度死にしわれをも イエスは生かしたまえり
咎と罪のかわりに 新たなるいのちあり

時の間をも おしみて きみはわれと語ろう
きみはわれをはなたず われはまた主にぞつく

流れおつる涙も 肩ににのう荷物も
きみは知りて憐れみ 愛のみ手のべ給う

時の間をも おしみて きみはわれと語ろう
きみはわれをはなたず われはまた主にぞつく

うめき叫ぶ夜はなし 罪とえにし絶ちし身
みざに近く安らう あまつ歌つねにきく
時の間をも おしみて きみはわれと語ろう
きみはわれをはなたず われはまた主にぞつく

病めるわれに手をおき 弱きところ強くし
まがに幸に励ます 主イエスこそ神にませ
時の間をも おしみて きみはわれと語ろう
きみはわれをはなたず われはまた主にぞつく

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。

「また弟子たちに御自身を現された」、「イエスが岸に立っておられた」、「陸から二百ペキスばかりしか離れていなかった」、「イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目」。エマオの途上で、同じくしてペテロに、そして弟子たちの前で魚を召し上がり、また今朝も。イエス様は決して遠くない所でいつも私たちを見守り、

「子たちよ」と私たちを呼び、お言葉を語られ、私たちが御言葉の通りにすればまた輝かしい奇跡を現してくださいます。「目には見えなくても私はあなた方と共にいるんだよ」というメッセージを今日もありがとうございます。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン